

走馬燈（植松君追悼記）

自分の仕事ではないと思うと眠さや寒さも案外気にならない。どうしてもデータを取らなければならないという強い思いはないからただ好奇心だけでやれる。時々、二人で小屋の外に出て水槽の見回りをする。水槽の中には小砂利を敷いて、雄雌のシロザケが入っている。メスのシロザケの両体側には電極が入っていて、そこからコードがつながって、コードは釣り竿の先からつりさげられている。今とは違う。データロガーもないし発信機もない。手作りの時代だ。こんな状態でシロザケが普通に産卵行動をするものだろうか。

シロザケの産卵時の筋電図をとるという仕事に付き合うことにしたのは、昼間、自分の仕事を手伝ってもらったお礼という気分もあるのだが、他人の仕事がおもしろそうだという野次馬気分もある。私は気楽に面白がっているが、彼は期待と不安で必死だろう。データが取ればいくらでも次の仕事の展開は考えられる。気持ちははやる。もう日付も変わって小雪も降っているのだが、時々、小屋を出て池の中の魚の様子を見に行く。その間は、たわいもない話をしたり簡単なゲームをして時間をつぶす。そのたびに、彼は一人でも大丈夫だからもう帰って寝ろという。

深夜をかなり回って、もう明け方に近いころ、「やった。」と彼が大声を上げた。記録計のチャートには、左右の体側筋が同時に強縮する、明らかに遊泳時とは違う波形が記録され、メスのサケは卵を産んでいた。

それからしばらくして、もう少し装置は改良され、産卵時の雌雄の体側金の筋電図に関する彼の論文が発表された。多分、彼の最初の学術論文だと思う。放精と放卵はともに左右の体側筋が同時に強縮し腹圧が高まることによって行われる。雄の放精時の筋肉の振動がメスに伝わりそれが放卵行動の引き金となる。

まだ、二人とも若く大学院生だった。わたくしが1年先輩で研究テーマも全く違っていたが、水産実験所や岩手県沿岸など、調査地点がたまたま重なっていたため、時々、一緒に行動した。その二人が、広島大学で同僚とし働くことになるとは思わなかった。彼が先に広島大学に職を得ていた。わたくしの採用時に、学部長は彼に、「今度採用を検討している男はあなたの先輩だそうだが、もし嫌な奴ならば採用しないから、正直に言ってくれ。」と尋ねたそうだ。彼は、「あの人ならば良い。」と答えてくれた。

それから、いろいろなことをした。彼の部屋でコーヒーを飲み。サッカーをやったり、合同で卒論発表会をやったり、練習船で調査航海をしたり。調査航海では判断ミスで嵐の中に突っ込んでしまったり、荒天で港に閉じ込められた時は酒ばかり飲んでいたり。

そして、私が転勤になり、別々の職場で働くことになった。まだ二人とも30代だった。その後、彼は研究科長を務めたりすることになった。その話を聞いた時に私は、彼は純粋に

自分の興味で研究をしたいタイプであり、研究科の運営などというマネージメントは最も嫌いだろう。かわいそうなことはやめた方が良かった。それでも、彼は癌を患いその治療をしながら仕事を全うした。

3月の学会で彼に会った。休息室で静かに座っていた。後ろから声をかけると、よく自分だとわかったねと不思議なことを言った。もうすっかり年取ってしまって、昔の自分とはすっかり違っているだろうと寂しそうに笑った。「俺も今月で定年退職だよ。」と返したがあまり会話は進まなかった。

そして、3日前に彼の訃報を知った。あの時、彼は自分の死期を悟り、半分向こう側に行っていて、みんなに会いに来たのかもしれない。もしそうだとすれば、昔話をしたかった。あの頃は二人とも若かったね。今もキラキラと輝いている思い出をありがとう。
Uさん、安らかに眠れ。合掌。